

## ひじりの声 上田 藤市郎

第二次世界大戦が終了したとき、夥しい人命、資財を失い、人間相互の信頼や精神的な遺産も壊され世界の良識ある人々は戦争の無意味を痛感したはずである。その後七十五年を経て、今日の我が国や世界の状況を見ると、その時代の人間が、命や平和について抱いた反省や未来への希望が、どんなに切実なものであったとしても、その迫真性を次世代に伝えることは極めて困難であることがわかる。

今なお、核兵器を保持する国家は減らないし、被爆国である我が国がそれを非難することもない。軍事力を背景に国家や市民を暴力で支配する権力、莫大な資金を使って恣意的な政治を進める指導者、独裁で専制的支配力を行使して人民に恐怖心を与え続ける体制もある。この理不尽な世界の状況は、過去と少しも変わっていない。我が国の政治家は与野党を問わず、自己責任回避と付和雷同傾向が強く、政治家としての確固とした展望と説得力を欠いている。

ここで重要なのは、我々個人個人の明確な意思力である。自分はどう生きるのかを考え直して、不動の指標を明示しなければならぬ。

## 藤樹人間学塾… 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせることで議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを

目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

四月五日(日) 午後、安曇川公民館で第百四回の塾を開きました。

## 高島藤樹会の活動

今回は、『中庸解』の第二十章の続きです。「天下国家を治めるには九經あり……」。大意は、人の上に立つものは、有能な人材を活用し、周りの親族のみならず庶民にも心を配り、事業者や旅行者も配慮するよう

にすれば、自然と天下の政治が上手くいくというものです。

今回は、新型コロナウイルスの感染拡大が進んでいることについて考えました。ダライ・ラマ法王の宗教者としてのメッセージ、池上彰氏の歴史的な視点からの提言などをみました。そして、藤樹の「孝」思想と関連付けて考えてみました。藤樹思

想では、我欲への固執を除去して大宇宙(天)を敬い、隣人を愛することを教えています。しかし現代社会では我欲の増殖がどんどん進み、それは地球資源の多消費↓地球温暖化↓極度の気候変動となって環境破壊が進み、貧富の格差が拡大し、戦争等を引き起こしています。天がこうした現代の人類の行為に警鐘を鳴らす意味でウイルスを発生させたのではないかと考えられます。コロナウイルスは、人類の生命上にも経済上の甚大な被害をもたらし、影響の長期化は避けられません。



そこで、この危機をいかに乗り切るかを皆で議論しました。総合的に考えると以下がいえると思います。

① 人類の連帯、自国第一主義から国際協調、国内協調(利他の心)への転換が必要、② 改善策があるなら心配せずにそれを実行する、③ 我欲をコントロールする価値観への転換、④ 個人が免疫力を高め、自衛することを心掛ける。

五月はコロナで休講とし、六月六日(土) 午後、第百五回の塾を開きました。京都・大津からも含め十名の参加でした。

今回は『中庸解』第二十章の続きで、「九經の効」という節です。大意は、「中庸の道(人間の生きるべき道)は太虚(天)に満ちているが、人々は欲などの惑いのためその道から離れている。そこで君主が五事を正してその道に戻れば、身が修まり中庸の道を得ること(修身)ができる。修身ができれば、(中略)周辺から順に天下が治まっていく」。

そのことが現代にも通用するかについて、「ドラッカーの教え」で説明しました。古来、統治のためには、「機能」と「尊敬心」が重視されてきたが、近年大きく欠けている「尊敬心」が重要である。さらに、対立の「バランスを取る」のではなく、「調和」が大事である。「調和」とは、共通の利益を基盤に協力が行われる、と述べています。その根底に